【図書館学遺産セレクション 1】

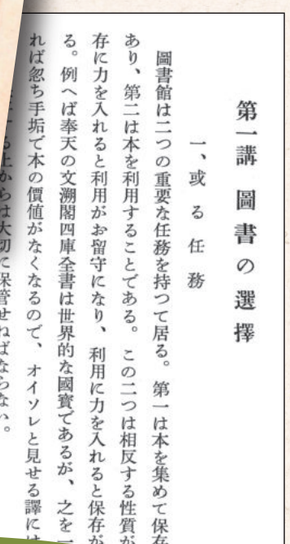
監修—近代書誌懇話会

図書の選択と整理法
—満洲国における彌吉光長

全一・別巻
【復刻版】

著—彌吉 光長
編・解題—新藤 透

戦前期の「図書選択論（選書論）」について記述した
貴重な成果でありかつ「満洲国」の図書館員向けに
書かれた図書館業務の実践的な内容。



第一講　圖書の選擇

一、或　る　任　務

圖書館は二つの重要な任務を持つて居る。第一は本を集めて保存
あり、第二は本を利用することである。この二つは相反する性質が
存に力を入れると利用がお留守になり、利用に力を入れると保存が
る。例へば奉天の文溯閣四庫全書は世界的な國寶であるが、之を
ればゝ忽ち手垢で本の價値がなくなるので、オイソレと見せる譯には
も上からは大切に保管せねばならない。
民衆教育の立場からなるべく廣く本を
やかましいことを言つたのでは民衆教

本書一巻目次

〈第1講〉図書の選択
1、或る任務
2、図書の選択
〈第2講〉図書の受入
1、図書整理の順序
2、受入事務
〈第3講〉分類表
1、簡単な理論と歴史
2、有名な分類法の話
3、分類表の備ふべき条件（附、我が分類表）
〈第4講〉分類の実際
1、分類の規約
2、図書記号と函架目録
〈第5講〉目録の作り方
1、目録の基礎
2、書名目録
3、分類目録
4、主題目録
〈第6講〉著者目録
1、誰を著者と決定するか
2、個人著者名の形
3、団体著者名の決め方
4、書名記入にのみよるもの
5、出版事項、巻頁事項
6、排列
〈第7講〉資料の整理について
1、資料蒐集法の初歩
2、資料の種類と整理
3、逐次刊行物
4、資料分類の注意
附、主要参考書

【図書館学遺産セレクション】

人がいかなる関心からみるかにより資料の持つ価値は変わる。
資料が単にそこに存在しているのではなく、人々がそこに
意味や価値を見出し、あるいは保存・継承を図ることによって
それがはじめて歴史「遺産」になる。
人々の営為を重視するのが歴史「遺産」という考え方である。
歴史「遺産」を豊かに継承していくためには、活用が示され、
多用な価値観を持つ担い手によって、
再び意味づけられることが必要である（村井良助）。

金沢文圃閣

【図書館学遺産セレクション 1】

監修—近代書誌懇話会

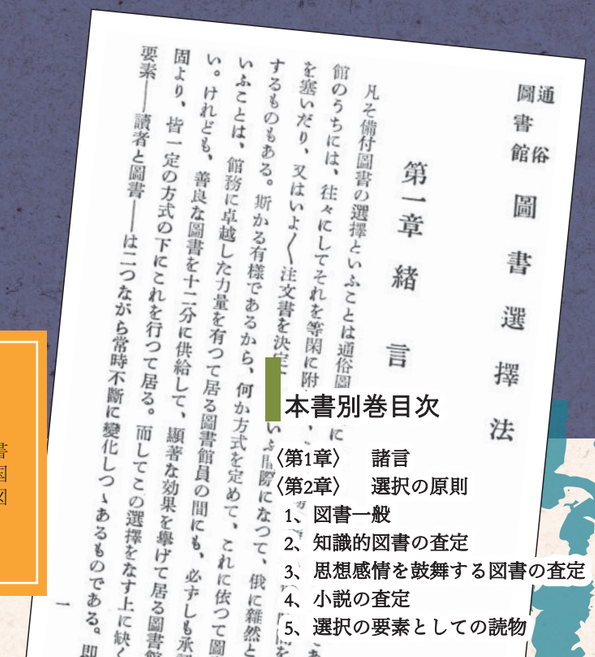
図書の選択と整理法
—満洲国における彌吉光長

全一・別巻
【復刻版】

レガシー（遺産）として集積された図書群。
良きにつけ悪しきにつけ継承することこそが
わたしたちの手持ち資産の幅を広げ、
単線的に描かれてきた図書館の歴史を
複線化する手立てとなる。

著—彌吉 光長　やよし・みつなが　1900〜1996

図書館界における戦前から戦後にかけての「大立者」。
戦前、満洲国立建国大学助手として図書館に勤務、満洲国立中央図書館設立準備に尽力、満洲国立奉天図書館長などを経て、戦後、国立国会図書館に長く奉職し、日本図書館協会などの要職を歴任。（株）図書館流通センター（TRC）の副社長に就く実務家としての顔も持つ。
戦後を代表する「図書選択論の専門家」。



通俗圖書館　圖書選擇法

第一章　緒言

凡そ備付圖書の選擇といふことは通俗圖
館のうちには、往々にしてそれを等閑に附
を塞いだり、又はいよ〳〵注文書を決定
するものもある。斯かる有樣であるから、何か方式を定めて、これに依つて圖書を選擇すると
いふことは、館務に卓越した力量を有つて居る圖書館員の間にも、必ずしも承認されては居な
い。けれども、善良な圖書を十二分に供給して、顯著な効果を擧げて居る圖書館に在つては、
固より、皆一定の方式の下にこれを行つて居る。而してこの選擇をなす上に缺くべからざる二
要素——讀者と圖書——は二つながら常時不斷に變化しつゝあるものである。即ち或る場合に

本書別巻目次

〈第1章〉　諸言
〈第2章〉　選択の原則
1、図書一般
2、知識的図書の査定
3、思想感情を鼓舞する図書の査定
4、小説の査定
5、選択の要素としての読物
〈第3章〉　選択の実際
1、印刷物の利用
2、図書委員
3、図書費
4、購入用図書名の蒐集及精査
5、無料の資料
6、購入の遅速
7、雑誌の選択
8、児童読物の選択（略）
〈第4章〉版の種類
〈第5章〉出版書肆
〈第6章〉図書選択用の資料
1、個人からの助言
2、印刷目録
3、図書評論

編・解題—新藤 透（國學院大學准教授）
造　本—B6／A5判・糸上製函／並製・総334頁
刊　記—2019年4月
揃　価—15,800円（別巻のみ分売可）ISBN978-4-909680-29-7

一巻（248頁）
彌吉光長『図書の選択と整理法』東方国民文第21篇（満日文化協会、1940年）

別巻（86頁）ISBN978-4-909680-30-3（別巻のみ分売可　3,000円）
『通俗図書館図書選択法』（山口県中央図書館編・刊、1937年）
＊解題・刊行のことば・総目次

日本人によって書かれた初の
「図書選択論（選書論）」単行書＝一巻
「図書選択論（選書論）」を主題とした初の翻訳書＝別巻
とを併せて刊行。
戦前期「図書選択論（選書論）」の内実に分け入る。

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣
〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30
Tel 076-261-8884　Fax 233-3111
□書店様へ…ありがとうございます
直接小閣までお申し込みください

図版はすべて本書より
価格は税別　050／05／4000

【図書館学遺産セレクション】刊行予定

『乙部泉三郎・県立長野図書館長—農村町村図書館経営論』
『戦時下日本主義の図書館—『日本図書館学』『皇道図書館』』
『戦前図書館における外交戦—動く図書館の研究』

「図書館学遺産セレクション」刊行のことば

―複線史への橋頭堡

戦前の暗さと戦後の明るさ。日本の図書館史に我々はこういった印象を抱く。それはさきの大戦をきっかけに、憲法レベルで言論の自由が保障されるようになった社会全体から醸し出されているにしても、しかし、図書館史にその印象をそのままあてはめてよいものだろうか？

今の図書館情報学は戦後改革の下で作られた。大臣級を館長に戴く巨大な国会附属図書館が新設され、そこが数百人規模でレファレンス業務を展開する。新しい公共図書館法制に初めて「レクリエーション」という言葉が入る。学問扱いされていなかった「図書館学」が本格的に大学で教えられ始める。そして日本の読書人は1970年代に、貸出しサービスを中心にすえた図書館の叢生を見た。

1978（昭和53）年、図書館史家の石井敦が企画した「復刻図書館学古典資料集」（日本図書館協会）は、こうした戦後の発展を説明する正典として選ばれた図書群だった。進歩史観に立つ石井が作った図書館史が、今も各種「図書館概説」を通じ、図書館関係者にイメージとして共有され、遺産として我々は引き継いでいる。

しかし、よく調べてみると、石井が手をつけなかった外地や地方、戦時の図書館学や実践に、ある種のクライマックスを示すものが見受けられるではないか。昭和の初め石川県で、良書を田舎の各家庭に行きわたらせるのに、小学生の学校通いに便乗すればよいと、考え実践した読書運動家がいたのには驚く。戦時下、大陸では、南京維新政府の国立図書館が日本人の指導下、通信事業という名の遠隔複写サービスを行う。大戦末期ともなると、ソヴィエト軍迫るベルリンから日本の文部事務官が、学術文献情報を東京に電信し続けていた。このような架空戦記じみたことを、戦後、我々の誰が想像しただろう。ユビキタス社会の先取りだ。

明治開国以来77年、帝国日本最後の日まで、さまざまな試みがあったのだ。

一方で戦後も74年。『公共図書館の冒険』（みすず書房、2018年）を読むと、政治史にあわせた通説とは異なる、図書館固有の時代区分がほの見えてくる。1950年代、神戸市立図書館で志智嘉九郎が鼓吹した「電話の中の図書館」、小田原市立の石井富之助が提唱した「テレビの下の本棚」などは、インターネットに先駆する日本のMEMEX（MEMory EXtender：1945年にヴァネヴァー・ブッシュが提唱）だ。戦後の図書館サービスも、貸出しの躍進という一直線では語れない。

古典は、読むべき正典である一方、さまざまな新しい読みを許すものであるはず。同様にレガシー（遺産）として今回集まって来た図書群もまた、良きにつけ悪しきにつけ引き継ぐことで我々の手持ち資産の幅を広げ、単線的に描かれてきた歴史を複線化して見せてくれる資料となるだろう。平成も末年の今、これらの遺産はこれからの新しい読みに十分「使える」図書群となるにちがいない。

今回の「図書館学遺産セレクション」は、単線的な発展史として書かれがちだった図書館史・学史を、多様なもの、複線的なものとして新しく読み、書くための橋頭堡となると信ずる。

近代書誌懇話会

本書の特徴……

① 戦前において数少ない選書の専門家の単著であり、
戦前の「図書選択論（選書論）」についてうかがう格好の史料となる。

……彌吉が関心を持っていた領域は多岐にわたるが、そのうちの1つが「図書選択論（選書論）」である。
戦後も『図書の選択』（理想社、図書館実務叢書2、1950年）、『新稿図書の選択』（1961年）、
『図書の選択』（日本図書館協会、シリーズ・図書館の仕事6、1967年）と継続して「図書選択論」の著作を刊行。
また「図書選択論」の論文も多数執筆し、日本図書館協会の図書選定事業にも長年関わり、
まさに戦後を代表する「図書選択論」の「専門家」と位置づけられる。
戦後、「図書選択論」は活発に議論されているが、対して戦前の図書館界は「権威主義的であって
利用者の要求や嗜好などを考慮せずに選書を行っていた」という言説がなかば「通説」になっている感がある。
しかしその「通説」は明確な史料的根拠に基づいてなされているわけではない。
まずは戦前に発表された書籍や論文・記事などからどのような図書選択論が存在したのか、
発掘して内容を検討する必要がある。

② 満洲国図書館における事務・実務作業の一端を知ることができる。
分類・目録作業の手順、そして受入れ業務に渡るまで、詳細に解説。

……図書館日常業務は、教科書や手引書などにも記されることは少なく、
各図書館で職員向けに作成されているマニュアルか、口頭で伝授されるケースが大半である。
特に時代が古くなればなるほど、どのような手順で行われていたのか現在では未詳となっている。
当時の図書館員としては「当たり前すぎる」ことであり、公刊書に記す価値もないと思われていたからであろう。
しかし彌吉はこういった極めて実務的な点も、説明を簡略化することなく詳細にふれる。

関連資料ご案内

＊文圃文献類従 37＊

戦前期「外地」図書館資料集

「樺太編」編・解題―鈴木 仁
「北京編」編・解題―小黒 浩司
「上海編」解題―よねい・かついちろう

「樺太編／北京編／上海編」 全6巻　完結

造　　本―A5 判・上製函　総2,786 頁
価　　格―「樺太編」／「北京編」／「上海編」 揃価150,000 円 （各巻25,000 円、配本毎分売可）

編・解題―春山 明哲

「台湾編」 全10巻　完結

造　　本―B6判・上製函　総3,940頁
価　　格―全巻揃価198,000円（配本毎分売可）

解　　題―小林 昌樹／編　　集―金沢文圃閣編集部

「朝鮮編」 全9・別巻　刊行中

付録資料―林 昌夫（元都立図書館）
「近代朝鮮公共図書館史における民族図書館の系譜」
造　　本―B5／A5／B6判・糸上製函／並製（別巻のみ）　総約2,650頁
価　　格―全巻揃価176,000円（配本毎分売可）

戦前期『外地』図書館に関する
資料面での本格的基盤整備

次回刊行予定
『戦前期「外地」図書館資料集―満洲編』